

辛さを覚える他者経験の事例研究

—サルトルにおける「対他存在」を手がかりとして—

学校教育開発学コース 遠藤野ゆり

A case study on the experience of someone else with pain
Based on "being-for-others" by Sartre

Noyuri ENDO

In order to understand the experience of someone else, we must focus not only on harmonious relationships but also on painful conflicts. According to Sartre's study about being-for-others, one experiences this in two ways. In one way, he feels a drain hole opened in his world by the other-as-object. In the other, he feels looked at by the other-as-subject. This article is a case study on what we call "delinquent children's" experiences with pain. These children had hardly ever met others who understood them. This study shows that, consequently, such children usually meet care givers as objects in the home, although sometimes care givers emerge as subjects for them. For example, a care giver's scolding fixes them. Like all of us, they often waver between both types of experience to avoid being transcended and hurt. And sometimes these avoidances prevent them from actually receiving the care givers' words. However an abrupt break in continuity made by internal negation accompanied by pain can enable them to receive the words of others which are addressed to their hearts. This elucidation therefore suggests that those experiences may allow them future positive experiences with others.

目次

はじめに

第一章 他者経験の解明Ⅰ サルトルにおける「対象—他者」

第二章 他者経験の解明Ⅱ サルトルにおける「主観—他者」

第一節 「主観—他者」とその「まなざし」

第二節 「主観—他者」と「対象—他者」との間での揺れ動き

第三章 「内的な否定」の子どもにとっての意味
おわりに

はじめに

これまで教育研究では、調和的他人関係によって生じる豊かな他者経験について多くの解明がなされ、調和的関係の中で共感を覚えることこそが、望ましい他者理解である、とされてきた。例えば、津守は、子

どもは、「自分でも十分に理解していない」自分自身の内面の願いを、おとなに理解されることによって、「次の段階へと心的発展」することができる¹⁾、と述べている。確かに、理解されるということは他者に受容されるという感覚を伴うことであり、こうした関係を生きられることは、他者との出会いを豊かな仕方でも経験できることである、と考えられる。そして、こうした体験を通して、子どもたちがいわゆるすこやかな成長を遂げていく、ということも確かであろう。

しかしながら、共感的他人理解にのみ解明の焦点を当てることによって、望ましいとされる他者関係を共感的関係に限定してしまうならば、例えば叱責や喧嘩等といった、私たちが通常少なからず体験しているような辛さを伴う出来事を、望ましくない、あるいは貧しい他者経験であるとみなし、他者との出会いによって被る辛さの意味を、見過ごしてしまうことにもなりかねない。その結果、他者との間の辛さを伴う体験からこそ可能になるような、新たな可能性を生きる生き方を、すなわち、いわゆる壁を乗り越えて成長を遂げ

るという出来事を、十分に理解できなくなってしまうであろう²⁾。

本稿で主として依拠することになるサルトルは、物とは異なる仕方で現れる他者との出会い方を、「対象—他者」(453頁, p.314)³⁾と「主観—他者」(453頁, p.314)という言葉で表し、他者の存在が私たちの世界をいかに崩壊させ、可能性を奪ってしまうかを解明している。確かに、サルトルの「対他存在」論は、相互相克関係に陥った人間関係についての解明であり、或る特定の他者経験についての解明でしかない、と言えるかもしれない。しかし、たとえそうだとした場合、『存在と無』における相互相克関係についてのサルトルの豊かな記述は、以下で述べるような子どもたちが、他者と出会うことでどのような辛さを覚えるのか、またその辛さゆえに子どもたちはいかなる経験をするのか、ということを実証的に解明するための大きな手助けとなるはずである⁴⁾。事例研究として本稿で考察することになるのは、子どもたちの自立の準備を手助けするための或る小舎制の「自立援助ホーム」(以下「ホーム」と略)⁵⁾での、養育者であるAさんとその奥様であるBさんとお二人と共に生活している子どもたちとの関わりである。本稿で考察する子どもたちだけではなく、そもそもこうしたホームで生活している子どもたちの多くは、かつて非行を表出していた子どもたちであり、「対象—他者」としての他者との出会いすら拒否して生きてきたような子どもたちである。以下でまず考察する食卓での事例における或る子どもの変化は、一見すると些細な出来事である、とも思われるかもしれない。しかし、こうした子どもたちにとっては、他者との出会い方が変化するということが自体に大きな意味がある。サルトルの記述は、日常生活においてはその自明性に隠されているところの他者との出会い方の変化を可能にしているものが何であるのかを、それゆえ以下の事例の子どもたちにとっての変化の大きさを、明らかにしてくれるのである。

第一章 他者経験の解明 | サルトルにおける「対象—他者」

私たちの意識は、物とは異なる仕方で現れてくる他者と出会うことによって、大きな作用を受けている。サルトルによれば、他者の出現は、「私の宇宙の諸対象のあいだに、この宇宙を崩壊させる一つの要素が出現する」(450頁, p.312)、という出来事である。例えば、ホームにおける次の記録は、どの家庭でもごく普

通に生じているような食卓の場面についてのものであるが、クレソンという野菜を通じて、共に食事をする他者と出会う学君(18歳, 仮名)の他者経験がどのようなものであるのかをうかがわせてくれる。

学君が、「これ何ですか?」、とステーキの上のっているクレソンを指してBさんに尋ねた。Bさんは、「クレソンっていうのよ。お肉の臭みを取るの」、と言った。学君は、「え、これ食べるんですか?」、とびっくりしたような表情になる。そう言ったとたんに私がクレソンを食べたので、「あ、食べた、すげ」、と言った。私が、「ええ?知らないの。美味しいのよ」、と言うと、学君も小さく切って食べてみた。そして、首を傾げている。「うーん、まあ確かに食べるけど」、とぶつぶつ言いながら口に運んで、そのうち、「あ、美味しいや、これ」、と頷いた。Aさんは、クレソンは馬が胸焼けした時に食べる、ということの説明をする。学君は「へえ」、と言いながら聞いていた。

「え、これ食べるんですか?」という、思わず口に出た学君の言葉は、Bさんの説明を聞くまで、クレソンという野菜が食べ物であることにすら彼が気づいていなかった、ということ語っている。学君がこの記録の直前まで生きてきた世界には、クレソンという野菜は存在していなかったのである。

サルトルによれば、他者と出会う時、私たちは、その人物を「一つの対象としてと同時にひとりの人間として」捉えている(449頁, p.311)。学君は、Bさんという他者が、彼が見たことなかった物体を食物として捉えていることに気づき、また筆者という他者が実際に彼の目の前でそれを食べ、「美味しいのよ」と言ったのを聞いた時に初めて、この緑色の植物が、どうやら口にすることができるものであり、それを食べると美味しく感じる人もいるのだ、ということ知らされたのだろう。すなわち、或る主観という「特権をもった」他者が存在しており、その他者にとっては、学君自身の「宇宙の諸事物」と同じ諸事物から成り立ってはいるが、学君にとっては「距離をもたない一つの組織が出来上がっていることを、認め」(449頁, p.311)ざるをえなかったのであろう。この時、学君はもはや、彼自身を世界の「中心に置くことができない」(450頁, p.312)⁶⁾。そのため、クレソンという物が存在していなかった学君の宇宙には、クレソンが食べ物として現れることによって、「その存在のただなかに、排水孔をうがたれ」たのであり、「この孔をとおして」、彼の「世界がたえず流れ出る」、ということが生じたことに

なる(452頁, p.313)。このことは、他者が、彼とは異なる或る価値観に従って、彼の宇宙に排水孔がうがたれる以前には彼には想像すべくもなかったであろう、その緑色の植物を口にするという行動をとり、さらに彼の宇宙を「崩壊」(450頁, p.312)させたということを、すなわち、それまで得体の知れない植物として学君に捉えられていたクレソンが味わったことはないけれども体内に摂りこむことのできる食べ物へと変わった、ということの意味している。

それどころか、この事例では、自己の宇宙の単なる崩壊以上のことが起こっている。というのは、学君は、Bさんや筆者という他者によって、クレソンを未知の物体と捉えるこれまでの宇宙が崩壊させられることを経験するだけにとどまらず、それを食べ物として体内に摂取する、ということにまで挑戦しようとするからである。未知の、そして一見した時には食べ物だと思われなかった物体は、人体に害を及ぼすものではないということが、それどころか場合によっては非常に良いものだとしてされている、ということが認識の上ではたとえ理解できたとしても、実際にそれを口にするのには、少なからずの抵抗感が伴うであろう。なぜならば、未知の食べ物を実際に口にするということは、宇宙の崩壊が、彼の身体の外部的変化にはとどまらない、ということになるからである。それゆえ、サルトルとともに私たちは、こうした経験を「内出血 *hémorragie interne*」(454頁, p.315)と呼ぶことができるようになる。学君は、自分の体内で起こる変化が、すなわち自分自身の内出血ができるだけ小さくてすむように、とでもいうように、クレソンの葉を小さく切って食べる。彼が恐る恐るクレソンを口にする様子は、他者によって宇宙を崩壊させられるという出来事が、彼にとって少なからぬ恐怖感を抱かせるものである、ということを実に示している。もちろん、この時の学君は、内出血をあらかじめ阻止しようとして、食べないこともできたはずである。しかし学君は、食べることを強制されたわけではないのに、自らクレソンを口にする。つまり、この時の学君は、クレソンを食べることによってたとえ内出血が生じたとしても、その後彼を待っているのが耐え難い辛さではないことがわかっており、だからこそ、未知の食べ物を口にするのできるのであろう。

学君が、クレソンをよく味わった末に、「あ、美味しいや、これ」、と言ったということは、当初未知の食べ物にすぎなかった濃緑の植物が美味しく食べられるものとしてふさわしく存在する場へと、彼の世界が

新たな意味を付与された、ということの意味している。彼は、クレソンを口にすることで、これまで味わったことのない味が存在する新たな世界を生きることになる。

そもそもホームで暮らしている、かつて非行を表出していた子どもたちにとっては、他者と出会うことの辛さは、通常そうみなされている以上に、より一層切実に感じられてきたはずである。だからこそ、その辛さを体験することによってより豊かな世界を生きられるという、そうした他者との出会いは、非常に重要な意味をもつことになる。

第二章 他者経験の解明II サルトルにおける「主観—他者」

第一節 「主観—他者」とその「まなざし」

サルトルは、上述したような「対象—他者」としての他者の現れ方は、他者の現れの一面にすぎない、と指摘する。というのは、「対象—他者」として現れる「他者は、やはり、私にとっての対象である」(451頁, p.313)からである。すなわち、ここにおいては、他者との出会いは、「全宇宙の一つの凝固した滑りゆき」(451頁, p.313)にとどまる。他者によって確かに宇宙の崩壊が生じるけれども、しかし、他者の対象性によって、「宇宙、流出、排水孔、そのほか一切のものが、さらにふたたび回復され、ふたたびとらえられ、凝固して対象となる」のである(452頁, p.313)⁷⁾。

そして、サルトルは、他者が、対象—他者として現れるだけではなく、時として、もはや私たちにとって対象化することができないような仕方で現れることがある、ということを実に示している。というのは、他者が或る主観性を備えている以上、私たちは、「他者によって見られる」という「不断の可能性」(453頁, p.314)をも生きているからである。自分は対象—存在として他者に顕示されている、ということに私は気づいている。しかも、他者が私を対象としているということがありありと自分に感じられる時には、他者はすでに私にとっての対象ではありえない。この時、そこには「他者の根本的な転向」が生じており、この転向こそが、「他者をして対象性から脱出させる」(453頁, p.314)のである。

他者という主観性にとって自分が対象にすぎないと感じられるようなこうした関係において、私は、一方的に見られる存在へと転落してしまう。この時私は、

自己が他者によってまなざされる存在にすぎない対象としてしか感じられなくなり、その結果、サルトルが「凝固」(818頁, p.502)と呼ぶような状態に陥ってしまう。サルトルは、他者のこうした現れを、「対象—他者」と峻別して、「主観—他者」と呼ぶ。主観—他者と出会うということは、当然ながら、対象—他者に出会う際に被るのとは比べようもないほど大きな辛さを伴う、ということになるはずである。そして、本稿で事例として挙げているホームでは、子どもたちにこうした辛さを体験させることによって、彼らがより豊かな生を営めるようになることをめざしたAさんの働きかけがしばしばなされているのである。

そこで、他者の主観そのものが経験されている時の子どもたちの他者経験が典型的に明らかとなる事例をまずとりあげたい。この事例で考察することになる樹理さん(16歳, 仮名)は、次の記録の数日前から続けて、門限に大幅に遅れていた。

門限から一時間過ぎた頃に、玄関で音がして、樹理さんが帰ってきた気配がした。小さな音だったが、Aさんはすぐに、「あ、樹理ちゃん帰ってきたね」と言った。しかし、ダイニングに来る気配が全くなく、しばらくすると、そっと二階に上がる音が聞こえた。階段が幾分老朽化しているので、人が昇る時には、どんなに音をたてないようにしても、階段が軋む音がダイニングにまで聞こえてしまう。しばらくしても樹理さんがダイニングに入ってくる気配がないのを感じたのか、Bさんが、「私、声をかけてきますね」と言うと、樹理さんと呼びに行った。しばらくして樹理さんが降りてきた。

まず考えられることは、この時の樹理さんにとって、Aさんは、対象—他者としての存在にはとどまっていなかった、ということである。彼女は、Aさんに叱られるかどうかはまだわかっていないにもかかわらず、こっそりと二階に上がってしまう。もしも、樹理さんにとってAさんが対象—他者にすぎなかったのであれば、樹理さんは、例えば、今ごろドアの向こうでAさんは怒っているだろうな、ということをつえられたであろう。そして、そうした認識から導き出される、こっそりと二階に上がってしまうよりはその前にAさんに謝った方が良いという可能性を考え出し、この考えを実行に移せた、と考えられる。しかしながら、樹理さんは、この可能性を実現できずに、こっそりと二階に上がってしまう。このことから、樹理さんは、Aさんに実際に叱られる以前から、Aさんに叱られる辛さを、あたかも実際に体験しているかのごとくまざま

ざと感じていた、と考えられる。すなわち、樹理さんは、もしも自分がAさんだったらという想定をすることによって、つまりAさんに自己移入することによって、自分のしかるべき振る舞いを選択したのではなく、Aさんの主観そのものを感じるという体験をしていた、と考えられるのである。

そうであるならば、この時、樹理さんは、Aさんを、内出血を生じさせるだけの、それゆえ自己の宇宙の崩壊を回復することができるような対象—他者として捉えることができず、Aさんは彼女の対象性から脱出していることになる。対象となっていると感じられているのは、むしろ樹理さん自身である。樹理さんは、Aさんに一方的に叱られる存在へと、すなわち、Aさんにまなざされる存在へと転落する⁸⁾。

上述の事例における樹理さんは、Aさんに対面し、Aさんのまなざしを直接に体験する以前から、Aさんが自分にまなざしを向けている、ということがありありと感じていたのであろう。このように、他者が自分をまなざしている、と自分自身で感じること自体が、私たちにとって非常に辛い体験である。サルトルは、有名な鍵孔の例において、まなざしを向けられるということは、向けられる者にとって、「突然」その者自身の「存在において襲われる」ということである、と記述している(459頁, p.318)。他者によって自分がまなざされているということは、「他者の自由のうちに、他者の自由によって書きこまれてしまうような、私の存在」(462頁, p.320)が、自分にとって露わになる、ということである。Aさんという他者が自分をまなざしていることを感じる直前までは、樹理さんは例えば、まず最初に謝ってしまおう、と考えたり、あるいは門限を過ぎていることに気づかなかったふりをしよう、と考えたりするなど、様々な可能性を彼女自身の可能性とすることができたはずである。ところが、他者のまなざしは、自分がこうした諸可能を備えていることまでをも捉えてしまっているように、まなざされる者自身には感じられてしまう。すなわち、樹理さんは、Aさんの「まなざし」を、彼女の「行為のさなかにおいて」、彼女「自身の諸可能性の固体化および他有化として、とらえる」(464頁, p.321)しかなくなるのである⁹⁾。他者にまなざされることによって、樹理さんは、最初に謝るという可能性も、気づかなかったふりをするという可能性も、あるいはそれ以外のこれから生きようとするあらゆる可能性も、もはや実現することができなくなってしまった。こうした時、私たちは、あらゆる可能性を他者に奪われて、身動きができなくなってし

まう。すなわち、「私の諸可能が限定され凝固させられ」(477頁, p.329), その結果、「私の可能性が原理的に私から脱れ出る」(465頁, p.322)のである。樹理さんは、実際にダイニングに顔を出さなくてはならなくなる以前から、Aさんからのまなざしを感じることで、Aさんに叱られる可能性に晒されていることをありありと感じたであろう。普段なら楽しい時間を過ごすことのできる、明るいダイニングの雰囲気、自分にとって辛い場所となって現れてきていたであろう。そして、自分が玄関を開ける音がダイニングに響くのをまざまざと感じ、その音がAさんの耳に届いているのを感じ、まず謝ってしまうためにダイニングに入ってくる、という可能性を奪われてしまっていたのであろう。

そうであるならば、樹理さんは、息をひそめ、音をたてないようにそっと階段を昇りながらも、階段が軋む音を自分でも耳にしていたはずである。そして、その音がダイニングに届いているであろうことを如実に感じていたであろう。階段の軋む音によって、体重を備えた自分の身体が老朽化した階段の上に乗っており、自分の身体こそがその上に重力を働きかけるものとして存在している、というまぎれもない事実を、したがって他者にまなざされうものとしての現にここにおける自分の身体が存在を、樹理さんはありありと意識させられたであろう。この時の樹理さんは、反省したりAさんの様子を想像していたのではない。そうではなく、階段が軋む音を聞くということは、Aさんからのまなざしを感じるということと、全く同時的であり、同じことになっていたはずである。

そうである以上、樹理さんはAさんのまなざしを、階段を昇るという一つの選択をなしうる以前から、すでに感じていたことになる。そもそも彼女は、階段を上がる前に、玄関を開けた時から、廊下の突き当たりのドアの向こう側から漏れてくる話し声やにぎやかな物音を耳にしたはずである。そして、そこにほかならぬAさんがいることをありありと意識したはずでもある。そうである以上、ホームの玄関を開けたその瞬間から、二階の自室へとつながる目の前の階段には、自分の身を隠してくれることになるという「潜在性」が備わっていることを、すなわち、Aさんのまなざしを避けるための「与えられた可能性」(465頁, p.322)が備わっていることを彼女は感じたはずである。まなざしを避け、二階にこっそりと上がってしまうという彼女の可能性は、Aさんが自分をまなざしているということを彼女が捉えるかぎりにおいて、彼女の非反省的な意識

に露わになるのであり、自分がそのような可能性を生きているということこそが、樹理さんにまざまざと気づかれることになる。彼女は、二階に上がらずにはいられなくなる。樹理さんは、ホームに帰ってくるまでは、もしもすぐに二階に上がってしまえば、今度はその行為すらも叱られてしまうかもしれないから、まずダイニングに向かう方が良いのではないだろうか、というような思いを抱いていたかもしれない。ところが、こうした思いは、「私の可能となりうる可能性をもつもの」(110頁, p.79)であって、すなわち、認識の上で自ら選択しうる可能性にすぎず、彼女のこうした可能は、扉の向こうにいるはずのAさんの存在によって奪われてしまうのである。そして、二階に上がってしまうということは、それが彼女にとっての唯一の「私の可能性」(110頁, p.79)となってしまうとすれば、その効力を失うのである。

おそらくは、二階に上がって自室にこもりながらも、樹理さんは、降りてきなさいといつ声をかけられるか、とじっと身をすくめていたのではないだろうか。樹理さんは、じっと耳を澄ませ、あるいは目をこらしながら、自分が恐怖していることまでをありありと感じているのではないだろうか。そしてまた恐怖するということは、Aさんが自分を叱ろうとして待っていることを実感する、ということでもある。

第二節 「主観—他者」と「対象—他者」との間での揺れ動き

本章第一節での記録の後、Bさんに呼ばれ、一階に降りてこざるをえなくなると、樹理さんは、ドアの前でまず謝る。樹理さんをどのようにでも叱責することがAさんにとって可能となった今、Aさんのまなざしに晒されながら、樹理さんが凝固することなく実現することができる唯一の可能性は、叱られる前に謝罪してしまう、ということであつたのではないだろうか。謝罪し、自分は叱られるべき存在であるということ、自分はその自覚があるということ、まずAさんに伝えることで、樹理さんは、叱られる者ではない意識になろうとしたのではないだろうか¹⁰。樹理さんは、謝罪することができるということにおいて、不十分な仕方ではあれ、Aさんのまなざしを避けることが可能となるのである。

そのような可能性を備えている樹理さんに対して、Aさんは、次のように述べる。

「どうして上に行ったの。なんで最初にこの部屋に

来なかったの」、とAさんは淡々とした声で言った。樹理さんは少し困った顔になって、「〔遅刻が〕続いたから」、と低い声で言う。「そうよ、あなた、このところ続いているよ」、とAさんは少し低い声になって言った。「まあ座りなさい」、とAさんが言ったので、樹理さんはおずおずと椅子に座る。「どこで何してたの」、とAさんは厳しい口調になって言った。樹理さんは黙ったままだった。しばらくして、「どこって」、と低い声で呟く。「こんなに遅い時間まで、どこで誰と何をしてたの」、とAさんは続ける。「何をしてたっていうわけじゃないんですけど」、と樹理さんは、しばらくして、用心深く、といった様子で切り出した。「さつきさんと会ってました」。樹理さんが言うと、Aさんは、ふうんと少し考えるように頷いた。Aさんが、樹理さんとかつて仲たがいでホームから出て行ってしまったさつきさんに樹理さんが会うのは反対だ、と述べると、樹理さんは素直に頷いていた。

樹理さんは、遅刻という自分の失敗に落ち込んでいるかのように、こわごわとしている。このことから、またAさんの問いに即答する様子からも、樹理さんの深い反省が伝わってくるようにも思われる。ところが、Aさんは樹理さんに対して、周囲の者が驚くような厳しい言葉を投げかける。普段のAさんは、すでに十分に反省していると考えられる子どもに対しては、さらに厳しく叱ったりすることはほとんどない¹¹⁾。ところが、この時のAさんは、うなだれて落ち込んでいる様子の樹理さんを、簡単に不問に付してはしまわない。

では、なぜAさんは反省している様子を見せている樹理さんを、あえて強い言葉で叱らなければならなかったのだろうか。

「どこで何してたの」、というAさんの問いに答える前に、樹理さんは、「どこって」、と言いよどむ。こうした言いよどみは、どのような意識の表れだったのだろうか。

すでに考察したように、樹理さんは、Aさんにまなざされ、非常に大きな辛さを感じていた、と考えられる。とはいえ、樹理さんは、Aさんの見えざるまなざしによって、完全に凝固してしまったわけではない。帰宅した時点で、すぐにダイニングに入ってくる可能性はすでに奪われてはいたが、二階に上がってしまうという可能性は、彼女によって実現されているのである。つまり、もしもAさんが、自分が帰ってきたことに気づかないでいてくれたら、あるいは気づいても遅れた理由を追求しようなどと考えないでくれるなら、

樹理さんは、実際に叱責される辛さから、逃れることが可能になったはずであり、事実、彼女はその可能性にかけて、二階に上がることを選択しているのである。

主観—他者としての他者によって私の可能性がすべて超越されていると感じてしまい、何も選択することができない事態に実際に陥る、という出来事は、それほど頻繁には生じない。多くの場合私たちは、樹理さんが二階に上がってしまったように、主観—他者として差し迫ってくるような相手を、なんとか対象—他者に「転落」させようとして、すなわち、「私の方へ向けられた一つのまなざしを私がとらえる」ために、「《私にまなざしを向けている》眼」を「崩壊」させようとして、必死に努力するのであろう(455頁, p.316)。そうしなければ、まなざされる者は、他者によって超越される辛さそのものに、否応なしに放り込まれるからである。上述の場面では、あえて言いよどみ、会話の流れに一瞬の間を差し挟むことで、Aさんによって一方的に超越されている辛さを感じていた樹理さんは、その辛さから逃れようとしていたのではないだろうか。そうであるならば、この時の樹理さんは、Aさんにまなざされると感じてうなだれておりながらも、同時に、Aさんに一方的に叱られることから逃れようとしていたことになる。樹理さんのこの言いよどみは、Aさんにどこまで事実を語らされるかを押し量り、どのようにしてこの場を切り抜けるかを計算する、という樹理さんの構えのようにも、筆者には感じられるのであった。

なぜ、一見すると深く反省しているように見える樹理さんの振る舞いが、このような印象を筆者に抱かせたのかを明らかにするために、Aさんの次の働きかけを考察したい。

「あなた、さつきちゃんが困ってるのわかってるんでしょう。なんで平気な顔してただ会ってるだけなの」。Aさんは、厳しい声だった。樹理さんはうつむいて、肩にぎゅっと力を入れてAさんの話を聞いていた。「あなたとさつきちゃん、嘘つき合って、それでお互い困ってしまってさつきちゃんここを出ていったの、あなただわかってるんでしょ。ちゃんとあなたがさつきちゃんにホームの正しいことを伝えてくれるならいいけど。僕がさつきちゃんと会うのを反対するのはそこよ」。Aさんは強い口調で続けた。樹理さんは、じっと黙って聞いている。「あなた、どこでもそうでしょ、あそこで嘘ついて、こっちでも嘘ついて」。Aさんがさらに強い言葉を続けると、それまでじっと黙って下を向いていた樹

理さんは、むっとしたように顔をあげて、Aさんを鋭い視線で見た。「それでさつきちゃんに正しいことが伝わらないことを僕は心配しているの〔中略〕」。Aさんは、樹理さんのそうした様子を見ながら勢いよくしゃべり続けた。「ちゃんとさつきちゃんのことを考えなさい。自分のつごうの良いようにばかりしてるんじゃないありません」。Aさんがそう言うと、樹理さんはむっとしたように、「言ってますよ、ちゃんと」と少し小さな声で言った。「僕は嘘だと思ふな」。Aさんの断定口調に、樹理さんは本当にむっとしたようだったが、すぐに息を大きく吐いて、諦めたような表情になった。Aさんは、そんな樹理さんを見て、一息つくと、食事をするように勧めた。しかし、樹理さんがようやく箸を持ち上げたとき、Aさんは、また話した。「あなた、嘘をついてもこっちにはわかっちゃうんだよ。それを知っておいた方がいいよ」。そして、さつきちゃんは樹理さんのことを恨んでいるはずだ、と言った。樹理さんは、また動作を止めた。Aさんは、じろりと樹理さんの様子を見つめて、黙っている。樹理さんは、必死に怒りを抑えているように、肩でゆっくりと深く息をした。樹理さんがようやく動き出そうとしたときに、Aさんがまた強い口調で話した。「人を操作することを覚えたらだめよ。それは絶対にしちゃだめよ」。樹理さんはじっと黙ったまま、こみあげてくるものを抑えるように、無表情を決め込んでいた。〔中略〕何も言わないし何も動かない。じっと、肩をこわばらせて、嵐が過ぎ去るのを待っているようだった。

なぜ二階に上がったのか、と問われた時の樹理さんは、驚くほど素直に答えていた。「どこって」と一度は言いよどんでいながらも、その後では、不自然なほどにすらすらと答えるこの時の樹理さんの様子に、Aさんもまた、違和感を抱いたのかもしれない。

二階にそっと上がらずにはいられなかった樹理さんは、自分のやましさを十分に自覚しているし、それがAさんから叱責されるに値するものである、ということもよくわかっていたのであろう。叱責されるとわかっている時、おそらく樹理さんも、私たちが通常そうするのと同じように、その叱責に耐えられるだけの、いわゆる「心の準備」をしているのではないだろうか。あらかじめ心の準備をしておくことは、会話のさなかから自分の身を一步引くことであり、そうすることは、私を、あたかも当の会話を眺める者としてくれる。もしも心の準備をせずに相手に向かえば、相手は、まさ

に主観—他者としてたち現れ、私に相手の主観性そのものを体験せしめ、私の可能性を奪い、他有化し、私たちは非常に大きな辛さを体験してしまうことになるが、心の準備によって会話から身を引くことは、相手から一方的に超越される辛さから、幾分私たちを逃れさせてくれるのである。私たちはこうすることで、自分を超越する仕方で現れてくる他者を、すなわち、対象性を脱した他者を、自分の対象に何とか押しとどめようとする。つまり、自分を叱責するがゆえに、自分に辛さを感じさせる他者が、主観—他者として私を襲うまさにその瞬間に、私は、相手を対象—他者として捉えようと試みるのである。こうした試みにおいては、他者は、いわば、主観—他者と対象—他者との間を揺れ動くような仕方で、私に体験されているのではないだろうか。もしもこの時樹理さんがAさんによって超越されている事態から逃れようとして振る舞っており、樹理さんにとってのAさんの経験のされ方が対象—他者と主観—他者との間を揺れ動いているのであるならば、静かにうなだれている彼女に、Aさんの叱責は十分には届いていないことになる。なぜならば、Aさんの言葉が樹理さんの内面へと向かい、彼女自身をして彼女のそとへの世界へと逃亡せしめようとするまさにその瞬間に、樹理さんは、叱責の言葉を対象として捉え、眺めてしまうからである。Aさんは、樹理さんの最初の振る舞いの中にどことなく、そうした演技めいた従順さを感じ取ったからこそ、演技をすることのできない状況へと樹理さんを導き入れ、Aさんの言葉が彼女の内面深くを襲うことが必要である、と感じたのではないだろうか。

第三章 「内的な否定」の子どもにとっての意味

一見すると、樹理さんに対するAさんの上述の事例の中での言葉は、非常に厳しいものに思われる。子どもの言葉に耳を傾け、子どもの気持ちを思いやる、という態度と、この事例におけるAさんの態度との間には、非常に大きな違いがあることは否めない¹²⁾。

Aさんの、樹理さんの内面に強く働きかけるような、「あなたどこでもそうでしょ、あそこで嘘ついて、こっちでも嘘ついて」とか、「自分のつごうの良いようにばかりしてるんじゃないありません」とか、「あなたは言ってるの？僕は嘘だと思ふな」などという強い否定は、サルトルが、「内的な否定」(321頁, p.223)と呼ぶものである。内的な否定は、例えば、自己の世界内の一対象である茶碗はインク壺ではない、というような「外的

な否定」(321頁, p.223)とは明らかに異なる。なぜならば、外的な「否定の根拠は、茶碗のうちにあるのでもないし、インク壺のうちにあるのでもなく」、外的な否定は、「いかなる点においても両者〔=茶碗とインク壺〕を変様させず、両者の性質をいささかも豊かにさせたり貧しくさせたり」しないのに対して、内的な否定は、或る性質を拒否するだけではなく、「私たちがかかる性質を拒否した当の肯定的存在〔=私自身〕に対して、この拒否そのものが、その内的構造において、影響を及ぼしにやってくる」(321頁, p.223,〔〕内引用者)からである。ネガティブなニュアンスをこめて述べられる内的な否定の内容は、「否定性としてのかぎりにおいて、内面から私を特徴づけている」(321頁, p.223)。それどころか、サルトルによれば、「否定は、連続の突然の中断」(64頁, p.46)でさえある。Aさんが樹理さんに強い内的な否定をつきつけることによって、樹理さんはそれまでの連続した意識から断ち切れ、Aさんの言葉にむきあわされることになる¹³⁾。それゆえ、この時の樹理さんにとって、Aさんから向けられる強い否定は、彼女自身の「存在の肯定的な全体には何ら影響を及ぼさない〔中略〕というだけではすまされない」(321頁, p.223,〔〕内引用者)。つまり、彼女は、ダイニングに下りてきたばかりの時とは異なり、叱責を受ける者であると自覚することによって、叱責するAさんを何とか対象化するということが、もはやできなくなってしまっているのである。それどころか、叱られることに対して外見上は従順に振る舞う者として存在することにより何とかAさんのまなざしから逃れようとしていたのだとしても、彼女にとっては、Aさんからの内的な否定によって、そうした装いの中に安住している可能性さえもが奪われてしまっていることになる。事実、彼女はこの時明らかにむっとした様子を見せている。つまりこの時の樹理さんは、Aさんに反発を抱いていることを巧みに隠して、うなだれて素直に話を聞いているという、叱られている時のいわゆる理想的な姿とされている構えさえもとることができなくなっているのである。

構えをとることができなくなることによって露わとなるのは、対象化したり、そのことによってこの場を自分の統制下においたりすることのできない彼女自身の存在である。Aさんは、樹理さんが装っていたと考えられる外見を、強い言葉で否定することによって取り外し、このことによってようやく樹理さんの内面に自分の言葉を届けることができるようになったのではないだろうか。他方、黙りこんでじっと動かない樹理

さんは、そうすることで、彼女を一方向的に超越していくAさんを、何とかして対象—他者へと転落させ、このことによって自己を保とうとしているのであろう。おそらく、そうしなくては耐えられないほどに、彼女は辛さを体験し、また彼女の世界は、Aさんとの対話によって揺るがされた、と考えられる。

Aさんは、樹理さんの内面を強く否定し、彼女自身にあえて辛さを覚えさせることによってしか、この時の彼女のいわゆる頑なな心を開くことが、そして真の対話を可能にすることができないと判断し、この判断を実行に移したのではないだろうか。そしてこの時にこそ樹理さんは、自分が覚える辛さの真つただなかで、Aさんの言葉に出会うことができるようになったのではないだろうか。

おわりに

本稿における以上の考察からは、学君や樹理さんは、他者と出会うことによって辛さを覚えているにもかかわらず、その出会いによって、より豊かな他者関係を生きる可能性へと開かれていることが示唆されたのではないだろうか。とりわけ第二、三章の事例では、樹理さんはAさんから内的な否定を向けられたり、自分の可能性の隅々まで見わたされたりするという、非常に大きな辛さを体験していることが示されているが、そうした辛さは樹理さんのために彼女自身にあえて体験してもらいたい、という養育者としてのAさんの願いによってもたらされたものであった、と考えられる。そして、その辛さこそが、樹理さんの内面を大きく動かし、Aさんを含め、これから彼女が出会う他者との全く新しい出会い方を可能にしてくれることが予想される。

対他存在に関するサルトルの記述は、他者に否定されることによってこれまでの自分から断ち切られたり、また、まなざされることによって自己自身と新たに向き合うこともできる、という私たちのあり方を明らかにしてくれる。辛さを覚える他者経験が以後の子どもが生にとってどのような意義をもたすかを考察するためには、ただ単に子どもの内面に共感的に寄り添うというだけでは、あるいはその時の出来事を記述するだけでは不十分な場合がある。むしろ、他者経験が、サルトルが述べるところの子どもの意識と世界を揺るがし、一旦は崩壊させることが、あるいは世界そのものからの逃亡を導くことさえもが、いわゆる子どもを教育する場合には、時として大きな意味をもっており、

これらの出来事を、従来とは異なった視点で記述することが必要となる場合もある。そして、他者経験のこうした記述と解明とによってこそ、辛さを覚える他者経験によって可能になるところの、豊かな未来を生きられるようになるということの、いわゆる、壁を乗り越えるという仕方で成長していくようになるということの、教育学的意義が見出されるようになる。

(指導教官 中田基昭教授)

(付記 本稿は2002年度に東京大学大学院教育学研究科へ提出した修士学位請求論文「或る自立援助ホームにおける養育者の働きかけについて」の一部を加筆・修正したものである。修士論文だけではなく、本稿でも事例として使わせていただくことを快く承諾して下さったAさんとBさんに、この場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。)

注

- 1) 津守真, 『子どもの世界をどうみるか』, NHK ブックス, 1987, 15頁以下
- 2) 例えば生越は, サルトルのまなごし論に基づいて, 不登校の子どもが経験するであろう, 他者からまなごされる時の辛さを明らかにしている(生越達, 「登校拒否児にとっての眼差しの意味について」『学ぶと教えるの現象学研究 七』, 1997)。また加藤は, 「不安」に関するサルトルの記述から, 登校拒否児が体験する辛さの可能性を解明している(加藤誠之, 「登校拒否児の辛さの解明」『東京大学大学院教育学研究科紀要 第35巻』, 1995)。これらの先行研究は, 「登校拒否児に過度の辛さを体験させることがないために」(加藤, 同, 311頁)ということを目的としており, 辛さを覚える経験によって子どもが新たな世界を生きていけるようになる事例については, 解明していない。
- 3) 本稿では, J.P.サルトル, 『存在と無』, 松浪信三郎訳, 人文書院, 1997からの引用に際しては, 原則として邦訳書の訳文を使わせていただいたが, その際, "L'être et le Néant", Gallimard, 1943も参考にしたため, 必ずしも, 邦訳書に従わなかったところがある。また, 本書からの引用に限り, 引用文の後の()内に邦訳書と原著の頁数を併記することにより, その引用箇所を指示する。
- 4) 他方, 例えばシェーラーは, もしも自分が相手の立場だったら, というように他者に自己を移し入れるような仕方で他者理解とは別の次元にある「共歓」・「共苦」といった共同感情について丁寧な記述をしている(M.シェーラー, 『同情の本質と諸形式』, 青木茂他訳, 白水社, 1977, 87頁)。しかしながら本稿で考察することになるような子どもたちは, シェーラーによって本来の共同感情ではないとみなされているところの, 投入的な仕方で相手の立場に立ったならば, という自己移入による他者経験を経る機会さえも, 非常に限定されていた, と考えられる。そのため, こうした子どもたちの内面は, シェーラーに代表されるような共感や共同感情に関する記述によっては, 十分に解明されない。
- 5) 自立援助ホームとは, 児童福祉法第六条の二 第五項において, 「児童居宅生活援助事業」と定められ, 社会福祉事業法第二条の三 第二項において, 第二種社会福祉事業の「児童自立生活援助事業」と認められている, 厚生労働省管轄下の児童福祉施設の一形態である。ここでは, 帰るべき家庭をもたない, 15歳から18歳の子どもが, 養育者と共に暮らす中で, 人との関わり方をはじめとする様々なことを学びながら自立の準備を進める。筆者は事例のホームに, 多い時期には一週間に二泊という頻度で, 三年に渡って訪問させていただき, AさんやBさんや子どもたちと共に食卓を囲み泊めていただくという体験をしている。本稿の記録は, 筆者がホームで体験したことを, そのつど, 後日書きとめたものである。
- 6) この時の学君にとっての他者経験は, AさんやBさんの「多様な視点の存在に気づき, 自己の視点からだけではなく他者の視点からも対象を」捉え, 他者の立場に立つことによって視点を転換する「脱中心化」(竹内謙彰, 『心理学辞典』, 中島義明他編, 有甲斐社, 1999, 334頁)とは異なる経験である, ということに注意しなければならない。
- 7) 「ふたたび回復され〔中略〕凝固して対象になる」, ということから, サルトルの他者論においては, 相互相克だけではなく, さらには, 他者の異他性が保証されているような共同世界が豊かに記述されている, と捉えることも可能なのではないか。
- 8) Aさんと樹理さんのこうした関係は, 叱られる者と叱る者という相克関係であり, シェーラーやフッサールによる, 共同存在についての記述によっては十分に解明できないであろう。
- 9) レインは, 「他の誰かの観察の対象としての自分自身についての意識性」が, 例えば「想像」や「推察」の過程で自己を反省することによって生じるとして, 「自意識」を解明している(R. D.レイン, 『引き裂かれた自己』, 阪本健二他訳, みすず書房, 1971, 141頁以下)。しかしながら, この時の樹理さんは, レインが述べるところの認識作用に基づく自意識をもっていた, とみなすことはできない。つまり樹理さんは, Aさんのまなごしを想像したり推察したりすることによってではなく, 彼女が置かれている状況のただなかで, Aさんにまなごされる自己をありありと感じている, と考えられる。
- 10) というのは, サルトルによれば, 私たちの意識は半透明であり, それであらぬところのものであり, それであるところのものであらぬ, というあり方をしているために, 謝らということによって, 謝らなければならないところのものではない意識を生きられる, ということ, このことこそがそれとなく自分自身に気づかれているからである。
- 11) Aさんは筆者に, 子どもを叱る時には, 執拗に叱りすぎて, 子どもの逃げ場をなくしてしまてはいけない, というご自身の考えを語ってくれたことがある。
- 12) Aさんのこうした接し方は, この事例に限られているわけではない。Aさんは普段から, たとえそれが子どもにとって辛くなるような話題であったとしても, その子どもにとって必要だとAさん自身に感じられる場合には, そうした話題を当の子ども自身や他の子どもの前でとりあげることが多い。例えば, 被虐待経験を抱えながら, 自分ではそのことを事実として受けとめ

られない子どもに対しても、子どもが自己を捉え直せることを願い、当の子どもにとって耐えられる限界を配慮しつつ、虐待の問題を話題の中心としてとりあげることがある。

- 13) というのは、サルトルによれば、人間が本当に変わるということは、その人間の本質から切り離される、ということだからである(cf.101頁以下, p.73以下)。